三重

東海

デジタル版ニュースはこちら

津総局
〒514・0032
津市中央9-2
TEL 059・228・4141
FAX 059・224・4817
mie.opi@asahi.com
県内取材網
四日市支局／伊勢支局／伊賀支局

購読・配達のご用は
0120・33・0843(7～21時)
紙面へのご質問・ご意見は
0570・05・7616
広告のご用は
059・351・1171

きょうの天気

6~12時 降水確率 12~18時

20	四日市	20
20	伊賀上野	20
20	津	20
40	鳥羽	20

四日市 西 西 津
伊賀上野 西 北西 鳥羽
湿度 50% 波 0.5m

気温	最高	最低
四日市	13度	3度
伊賀上野	11度	1度
津	13度	3度
鳥羽	12度	3度

あす

四日市 西 西 津
伊賀上野 西 西北西 鳥羽
湿度 40% 波 1.0m

2月4日
(旧1月7日)

日出		6.50
日入		17.26
月出		10.02
月入		23.53

「森から学ぶ魅力」語る 津でシンポ

「子どもといっしょに森と出会い、森から学ぶ魅力」をメインテーマにした第3回みえ森林教育シンポジウムが1日、県総合文化センターであった。トークセッションでは、子どもたちが森で学ぶ実例を林業家や教育関係者が紹介した。

パネリストは、松阪市の林業家堀内楓子さん、子どもが主体となって考える学びを研究する津市立家城小教頭の大西義孝さん、菰野町の「森の風こども園」副園長の嘉成永慈さん、山梨県都留市のネイチャーセンター博物館学芸員の佐藤洋さんの4人。

家業の林業の中で森林教育に取り組む堀内さんは、小学生らに森林散策などを通して「五感を使って、山や木といった自分の寿命を超えた存在との出会い、つながりを感じてもらっている」と話していた。

大西さんは、5年生の社会科・探究の学習で、子どもたちが自主的にアポイントを取ってみえ森林・林業アカデミーを訪れた実例を紹介。森林教育が主体的に学ぶことにつながったと話した。

トークセッションで、森林教育の実例について話すパネリスト＝県総合文化センター

ファシリテーターの森林業コンサルタント「モリアゲ」代表、長野麻子さんは「活動を進める上で悩みがあるのではないか」と問いかけた。

嘉成さんは、森林教育アドバイザーとして保育園や幼稚園を訪れている経験から「森林教育について、正確に理解してもらうのが難しい」と指摘。「『つながり』と『くらし』をキーワードに、森や田畑をフィールドに、地域の人たちとつながることが大切だと話している」と述べた。（鈴木裕）

タイムカプセル 24年ぶり開封

合併前の旧伊賀町 悪戦苦闘1時間半の末

伊賀市下柘植の旧伊賀町役場前で2日、2001年に埋められたタイムカプセルが掘り起こされた。特注品のカプセルは開け方がわからず、工具で切断する悪戦苦闘の末、ようやく旧町民との「再会」を果たした。

04年の市町村合併で伊賀市が誕生する3年前、当時の伊賀町役場が町民らから募った21世紀へのメッセージや町史、広報誌、記念品などをステンレス製円筒器に入れて埋めていた。

1時間半がかりで開封されたタイムカプセル（右手前）と中身を確認する関係者＝伊賀市下柘植

今回、柘植、西柘植、壬生野の各地域まちづくり協議会の会長世話人となり、稲森稔尚市長や地域住民ら約40人が見守る中で掘り出された。

ところが、20万円かけたカプセルは開け方が不明で、金づちでたたくなどしたが、開かないまま参加者のほとんどが帰った後、動工具で切断するなどして約1時間半がかりで開けることができた。後日、改めてお披露目や展示を検討するという。

西柘植地域まちづくり協議会の奥沢重久会長(76)は「埋めた当時は合併に向けて進んでいた時期。中身を確認し、これからの伊賀地域をどう進めていったらいいか考え直す良い機会になる」とした。（小西孝司）

森と共に 子どもたちは育つ

森や原っぱを駆け回って遊んだり「仕事」をしたりしながら、ちょっとだけ限界を超える挑戦をして自分のセーフティーゾーンを広げていく。子どもたちが成長していく様子を、保育所型認定こども園「森の風こども園」（菰野町）の嘉成（かなり）頼子園長(72)は、こう話す。子どもたちが生き生きと毎日を過ごしている森の風フィールドを訪ねてみた。

嘉成頼子園長

園庭から続く杉林に、園児たちの走る足音と明るい歓声が響く。やわらかい陽光が差し込む地面にしゃがみ、朽ちた倒木を棒で削ってみたり、保育士と一緒に切り株を落ち葉で飾ってみたり。

「寒くても、雪が降っても、みんな森や原っぱに飛び出していく」と嘉成さん。

木登りができる広葉樹の枝の上にある鳥の巣みたいな〝基地〟は、園を卒業した小学生たちが製作中のものだ。森を冒険している年長さんが、草むらを棒でかき分けて年中さんが通れる道を作ることもある。

自分の限界 ちょっとずつ超え

菰野のこども園

森の風フィールドは、園がある同町千草地区のあちこちに広がっている。「へんてこ森公園」「原っぱ森川猫じゃらし」「おじさんたちのひみつきち」や田んぼ、畑…。「『貸してあげる』『使って』と、地元の人たちが森や農地を提供してくれるし、一緒に作業もしてくれる。地域に支えられている」という。

園庭から続く森の中で、思い思いに遊ぶ子どもたち＝菰野町

森の風こども園 2007年に認可外保育施設「森の風ようちえん」として、菰野町千草に嘉成さんが創設。21年4月から保育所型認定こども園に。0～5歳の子どもが保育部と幼稚園部で生活する。

フィールドは、遊ぶためだけの場所ではない。田んぼや畑では、子どもたちが農作業で手や体を動かす。飼っているニワトリの世話もする。まき割りやみそ汁作りもやってみる。

「子どもに生命の大切さをどう伝えればいいのか。それを考えた時に、命があふれた場所に子どもたちを委ねて、生活に結び付いた体験をすることの大切さに気づいた」。嘉成さんは、こう話す。

「自然は子どもたちの興味や関心を引き出してくれるし、自分の力だけではどうしようもないことがあると気づかせてくれる。水は上から下へしか流れないし、大きな岩から飛び降りれば危ない、と。でも、子どもたちは自分の限界をほんのちょっと超えたところに挑戦する。挑戦しながら自分のセーフティーゾーンを作っている。小さな危険が、子どもたちを守っていく」

自分自身で成し遂げた経験は、自信にもつながる。「『自分って、なかないぞ』と考えるようになっていくと、周りの子どもの良いところに気づくようになる。お互いに認め合うことで仲間や友だちができる。社会の原点のような保育現場づくりに取り組んでいた」と語る。

便利な暮らしとは逆に、足を運び、手を使い、ともに汗を流してらしを作り上げる森のフィールドで、どんな子どもを育てようと考えているのか。

嘉成さんはいう。「AI（人工知能）が出てきて、人間はだんだんと物ではなくなってきているという危機感があるだからこそ、動物としての人間、人間らしい人を育てていきたい」（鈴木裕）